

武藏野日曜集会

プレローマ

——ヨハネ伝第1章 12～18節——

神光 真現者 太初に愛あり プレローマ 大いなるかな心や

恩恵と眞理

【ヨハネ1・12～18】

⁹ もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。¹⁰ 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。¹¹ かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。¹² されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。¹³ 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。¹⁴ 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、實に父の独子の栄光にして恩恵と眞理とにて満てり。¹⁵ ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『「わが後^{のち}にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり」と、我がかつていえるは此の人なり』¹⁶ 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。¹⁷ 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と眞理とはイエス・キリストによりて来れるなり。¹⁸ 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡^{ふところ}にいます独子の神のみ之を頤^{あわ}し給えり。

●神光

⁹ もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。

キリストは「真の光」。我々は太陽の光で光というものを初めて知るわけですが、太陽よりも凄い光がキリストの光だ。太陽の光は我々の肉眼によつていろいろな物を見せてくれるわけです。ところが、キリストの光はいくら肉眼でもこれは見えない。魂の眼で見ないと見れない。だから、一般の人は——私も始めはそうでしたが——キリストを受けとれない。キリストという光は、これは全存在が光なんです。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を読んでキリストにぶつかるわけです。そうすると、この人はケタが違う、我々とは質が違う。ところが、キリストは何ものでもない。

「キリストが光である」

ということは神さまの光を光らせているということです。キリストは無光者なんだ、光な

1994年2月13日

小池辰雄



んか無い。この「無」というのは虚無ではない無ですから、これが無限無量になる。神の光です。

「キリストが光である」

と言うときは、神さまの光を光らせている。キリストほど完全に神に平伏して自分を無にしているひとはないわけだ。だから私は、

「キリストは無者である」

と言う。無者の元祖はイエス・キリストです。

そうすると、神の光が、神光が入つてくる。我々の信仰もこの神光なんだ。キリストの光をいただいている。だから、いわゆる信仰なんか要らない。神さまの光が入つてくる、キリストの光が入つて来る。信仰とは身体からだで受けとる、全存在で受けとることです。信ずることは体受すること。信ずるとは、観念的に頭で、心で信じているというものではない。そんな信仰はダメです。体受する、身体で受けとる、全存在で受けとる。もし信の字を使いたいなら「信受」だ。仰いでいたつてダメなんだ、受けとらなければ。太陽の光をいくら仰いでいたつてダメだよ、太陽の光を我々は受けとつて光の中にいることが大事なんだ。

空気を思つていやしない。空気を吸つてゐる。空氣に囲まれて空氣を吸つてゐる。氣の世界です。肉体は空氣に囲まれ空氣を吸つて生きている。我々はキリストの靈氣を魂が受けとつて、靈氣を体受してゐる。それが本当の信仰だ。信仰という字は困るよ。信受する、神の光を体受する、それが本当の現実、まことの現実です。真の光を身体でもつて受けとる。それが真の現実だ。我々の相対的な現実ではない。本当の現実、滅びない現実、移りゆかない現実、昨日も今日も明日も同じこと。それが本当の現うつの世界、靈的な現の世界です。これは大変なことです。

● 真現者

¹⁰彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。¹¹かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

ユダヤ人はこれを受けなかつた。どこまでも「モーセ、モーセ」なんだ。モーセではダメなんだ、モーセは律法の世界だから。預言者でもまだ足りない。預言者イザヤなんてのは素晴らしいが。これは正にキリストの預言的 existence であつたけれども。

¹²されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる權をあたえ給えり。

キリストを受けとると、我々は神の子なんです。キリスト者は神の子です。

¹³斯かかる人は血脈ちすじによらず、肉の欲ねがいによらず、人の欲によらず、ただ神により

て生まれしなり。

「肉の欲ねがいによらず」



というのは、我々の生まれつきの自分の願いではないということ。「肉」というのは、「生まれつきの我」

のことをいう。生まれつきの我の欲によるのではなく、人の欲によらず、ただ神によりて生まれた。神によつてキリストを通して生まれた。キリストを受けとつて生まれた。

¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその榮光を見たり、實に父の独子の榮光にして恩恵と真理とにて満たり。

神の言なるキリストは肉体をとつて我らの中に宿りたもうた。

「幕屋を張つた」

という字です。我らは神の榮光を見た。その榮光は変貌の山で一番よく顕したもうた。自分が光つてしまつて、弟子たちは目が眩んでしまつた。

「恩恵と真理」

というのは時々でてくる言葉です。この「真理」という言葉は、何か觀念的に聞こえてしまつて困る。「まこと」というのは「本当の現実」ということです。神の現実が「まこと」なんです。「真現」という言葉はないけれども、「まことのうつづ」なんです。キリストは真現者、真の現なる者なんだ。教えではない。キリスト道あるいはキリスト現なんだ。うつつなんだ。太陽の光が我々の肉体的存在を完全に生かしている。そういうように、キリストという光は我々の靈的存在を本当に在らしめている。

神の言、靈言は肉体となつて、我々と同じこの肉体的な現実となつて、我々のあいだに幕屋を張つた、宿つた。だから、榮光を見ざるを得ないわけです。「変貌の山」のことは特にルカ伝9章32節に出でます。

「父の独子」

とは、キリストは「父よ」と言つた全くただ独りの独子ですから。ヨセフが父ではない。靈界の神さまが父なんだ。本当に不思議です。マリヤは聖靈によつてキリストをみごもつたのだから。ヨセフが、

「おかしいな、子供ができるはずがないんだが」といつて離縁しようと思つた。ところが、天使がやつてきて、

「そうではない。マリヤは聖靈によつて身ごもつて聖靈の子を生むのだ。お前が何も離縁することはない」

と、ヨセフは天使に言われた。あまりにも驚くべき現実で彼は戸惑つたでしそうけれども。

「恩恵と真理とにて満たり」

とは、キリスト自身が恩恵なんです。賜物（カリスマータ）というのは、キリストからいただいろいろいろんなものが賜物だけれども、キリスト自身が恵み（カリス）の本体です。キリストはカリスなんで、いろいろな賜物はカリスマータです。キリストは恵みに満ちている、真現に満ちている。



¹⁵ ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『「わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり」と、我がかつていえるは此の人なり』

ヨハネ福音書を書いたのはキリストの使徒ヨハネだけれども、この「ヨハネ」は洗礼のヨハネだ。洗礼のヨハネは、

「私はエリヤでもない。キリストを指し示すところのものだ」と言つた。キリストはヨハネのことを最後の最大の預言者だと言つた。というのは、自分

のことを神の子として顯したから。別なところでは

「しばらく黙つていろ」

なんて言つたけれども。

雪というものはおかしなものだね。水滴なんだけれども、あれは素晴らしい結晶をなしている。華のような結晶だ。自然現象というのは素晴らしいものだ。虹も水滴だし、雪も水滴なんだが、同じ水が雪になつたり虹として現れたり。雪景色は美事なものですね。

●太初に愛あり

ヨハネ伝というのは非常に不思議な福音書です。

¹ 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。

この第1節は凄い。私はこの「言」は、

「太初に靈言あり」

と思う。靈言です。ヘブライ語でもギリシャ語でもない。神の靈言です。響きでもいい。

「太初に響きあり、響きは神と偕にあり、響きは神なりき。」

と言つたつていい。

動物は言葉がないようだけれども、あれはお互いに音で、響きで分かるんだね、鳴き方で。この言葉以前の思いを知るようにならなければ本当はダメなんだ。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば……」

ということ。鳥も真っ黒だし、闇の夜も真っ暗だ。その鳴かぬ鳥の声が聞こえるかという。中世のエックハルトというのはそういう境地が分かる神秘家だった。アッシジのフランシエスコは鳥と会話したという。フランチエスコのところに鳥が寄つてくるんだ。言葉の奥の世界は愛なんです。愛がなければ、そういう言葉は読めない、聞こえない。理屈の世界ではないから。

「太初に愛あり、愛は神と偕にあり、愛は神なりき」

と、そう言つてもいくらいなんです。ヨハネ伝の第1章1節をそんなこと言うのは他にいないうだろうね。

⁴ 之に生命あり、この生命は人の光なりき。

というけれども、生命は愛がなければ生命ではない。愛のないものは本当の生命ではない。



キリストという不滅の生命は、これは不滅の愛なんだ。愛と光は同質なんだ。太陽の光は我々を愛しているところの、生命づけている光です。ゲーテが、

「キリストと太陽の前には無条件に平伏す」

と言つたのは、さすがは大詩人ゲーテだね。そういう大詩人が日本にはいない。漱石さんも足りない。蘆花もたりない。藤村もたりない。徳富蘆花と島崎藤村はあるところまできたけれども、それから先へいかなかつたからダメなんだ。夏目漱石は仏教的な悟りの方をねらつていたけれども、悟りではダメなんだ。

ゲーテは自然を愛した、そして自然に愛された。日本人は素晴らしい自然の中に生きている人類ですね。恵まれているんだ、日本というのは。その自然の愛を体感して、日本人は、その心は本当は優しいんです、いい自然を受けとつてているから。万国の人種の写真を見たときに、日本人はやはり一番温和な顔をしている。烈しい顔をしてない。ヨーロッパのクリスチヤンで、私はヒルティの顔は好きだ。あの人は本当に温和な顔をしている。ルターは信仰の戦いの人間だから、厳しい顔をしているけれども。フランチエスコだのヒルティだの、ああいうのはみな温和なんだ。

太陽と北風とが、ある旅人の上衣を脱がせる競争をした。風は一生懸命で吹いたら、旅人は一生懸命で着物をしっかりと持つて脱ごうとしない。風の力ではがそうとしたつてダメなんだ。太陽が暖めたら、ああ暖かいといって脱いだという。そういう話があるけれども、陽の光は風よりも力を持つていて。愛の力です。

●プレローマ

¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、實に

父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満たり。

靈的な存在であつたキリストが肉体をとつて我々の間に幕屋をはつた。それが「神の栄光」なんだ。福音書のキリストの言葉と行為、これは

「恩恵と真理とにて満ちてゐる」

ところの言葉であり行為である。だから、福音書自身が天国ですよ。キリストという天国、体が歩いて、ものを言つたりいろいろなことをやつたり、死人を甦らせたりする。大変なひとだ。棺桶に手をおいて、

「いどよ！」

と言つたら、若者が蓋を開けて出てきた。死人が甦つて出てきた。みなびっくりしてしまつた、

「大変なひとだ」

と。イエス・キリストというのは本当に大変なかたです。正に神の現象体。前にも後にもいない。お釈迦さんも悪魔と戦つたり、いろいろな恵みのことをしましたが、キリストの



方がもう一つ現実が凄い。

このキリストの愛を本当に身をもつて証したのが賀川豊彦です。ただ賀川さんは靈的な力は少し足りなかつたけれども、愛は深いひとです。

〔16〕我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。¹⁷ 法律法モーセによりて与えられ、恩恵と眞理とはイエス・キリストによりて来れるなり。¹⁸ 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を頤し給えり。」（ヨハネ1・16～18）

神の本当の現象体はキリストだけ。神の現^{うつ}、正に「現体」なんだ、「神現」「真現」なんだ。「プレローマ」とはギリシャ語で「充ち満ちる、充満」という言葉です。キリストは神の充满者なんです。神の光も力も愛も生命も満ち溢れている人。「プレローマ」という言葉はパウロが時々使つてている。パウロは賛嘆して言つてゐる。パウロのローマ書なんかを読むと、キリストに圧倒されてものを言つてゐる。キリストに逆らつていた最たるやつが完全にキリストにひつくり返されて、今度はキリストに満ちる人間になつてしまつた。パウロくらい鮮やかに変わつたひとは他にいない。ローマ書というのはその点で素晴らしい書翰です。

「それ神の満足れる徳はことごとく形體をなしてキリストに宿れり。汝らは彼に在りて満足れるなり。」（コロサイ2・9～10）

「神の充满」、これが「プレローマ」という字です。「満ち足れる徳」と訳してあるのは「プレローマ」という言葉なんです。神性の充满ということです。

「神性の充满はことごとく形をなしてキリストに宿つた。汝らはキリストにあってプレローマである」

ということ。

「汝らはキリストにあるところの充满である」

と訳してもいい。我々はキリスト性の充满にならなくてはいけない。十字架で空っぽにされると——神性の充满は聖靈のことです——聖靈が満ちて、満ち足りてくる。聖靈の内容は非常に豊かなものですから。聖靈というのは充满靈なんだ。

● 大いなるかな心や

禪の世界で、榮西禪師が悟りの最後の世界で、我々がもつてゐるいわゆる心でない本当の心——榮西が「大いなるかな心や」というその心は宇宙心だ——この宇宙心は本当の靈の世界、神靈の世界です。ゲーテなんていう大詩人はこの宇宙心的なものがある。榮西の禪の心は「大いなるかな心や」の一節に告白されている。

「大いなるかな心や。

天の高き極むべからず、而るに心は天の上に出づ。
地の厚き測るべからず、而るに心は地の下に出づ。



日月の光は^こ躡^ゆべからず、而るに心は日月光明の表に出づ。
大千沙界^{だいせんしゃかい}は窮^{きわ}むべからず、而るに心は大千沙界の外に出づ。

それ太虚^{たいこ}かそれ元氣^{げんき}か。

心は即ち太虚を包んで、元氣を孕^{はら}むものなり。

天地我を待つて覆戴^{ふくさい}し、日月我を待つて運行し、
四時我を待つて変化し、万物我を待つて発生す。

大いなるかな心や。

吾已^{われ}むことを得ずして、強いて之に名づく。
是を最上乘^{さうじょう}と名づけ、また第一義^{だいいちぎ}と名づけ、
亦般若実相^{はんにやじつそう}と名づけ、また一真法界^{いつしんほつかい}と名づけ、
亦楞嚴三昧^{りょうごんさんまい}と名づけ、亦正法眼藏^{じょうほうげんざう}と名づけ、
亦涅槃妙心^{ねはんみょうしん}と名づく。……教外別伝^{きょうがいべつでん}と号す。……」

凄いやつだね、この榮西^{めぐみ}というのは。そういう心は全く宇宙心です。キリストは宇宙心を持つていて。仏道でもキリスト道でも、究極^{あい}のところにいくと相接するところがある。相似するものがあります。概念の世界を超えていますから、通ずるわけです。藤井武先生の所に行つていた時に、先輩に佐藤得一^{だいいち}という人がいましたが、これが『仏教の日本の展開』という本を書いてますが、なかなか面白い本だ。かなりそういう境地の分かつた人です。

● 恩恵と真理

¹⁶ 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵^{めぐみ}に恩恵を加えらる。

「我らは皆その充満によつて、充ち満ちたところのプレローマを受けて、恩恵に恩恵を加えらる」

ということ。恩恵また恩恵で、圧倒される。

¹⁷ 律法^{おきて}はモーセによりて与えられ、恩恵と真理^{まこと}とはイエス・キリストによりて来れるなり。

もうケタが違う。律法の世界ではダメなんです。

「恩恵は審判^{さばき}にうち勝つ」

とヤコブ書にも書いてある。律法の世界は審判の世界ですから。恩恵の世界は赦しの世界。赦し、救う世界です。律法では救はこない。ところが、ユダヤ人はいつまで経つてもキリストを受けとらない。結局、モーセでおしまいだから、非常に頑^{かた}くななんだ。

「頑^{かた}くな民」

といわれる。頑固なんだ。ユダヤ人というのはそういうところがある。その頑固な筆頭がパウロだった。その頑固な筆頭のパウロがひつくり返されて、キリストの恩恵の世界に入った。ユダヤ教ではいつまでたつてもダメなんだ、キリスト道にやつてこないと。



「律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理はイエス・キリストによつてやつて來た」

と。だから、それではつきりします。

¹⁸未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顯し給えり。
「独子たる神、即ちキリストが之を顯した」

というわけです。

こんなことを私は前に書いた。

「初めに原始を有つものは終末をもつ。永遠の神は天地創造とともに時間の中に顯れた。これが原始であり、その天地の完成が終末である。そこに神の歴史がある。無始無終のものは永遠をもたない。永遠者が過去現在未来を掌握しているのである。言と靈とはシノニム（同じ内容の言葉）で内実としては不可離の関係にあるので、ロゴス（言）と訳しても、普通の言葉ではない。靈的な内実と実力をもつた言で、私はこれを靈言ないし言靈と訳したい。「初めに言靈があつた」である。明治初年頃の訳に「原始に靈言じやる」という訳があつた。同じ考えの人気がいたものだと嬉しく思つた。古い訳には、「原始に道ありき」と書いてあつて、これも捨てがたい。「道」とは意味的なものではなく、道的な実存者を表そうとしているからである。それでゲーテも『ファウスト』の中で、「ダス・ヴォルト」（言）にあきたらずして、「ニア・ズイン」（意）、「ティ・クラフト」（力）そして最終的に「ティ・タート」（行為）『ファウスト』1237行と、ファウストをして訳さしめている。空言でなくて実言であるから、行為面からその実相を表現しようとしたのである。

なんてことを書いてある。ゲーテはそういうわけで、

「初めに行行為ありき」

と訳した。さすがはゲーテだね。

「恩恵と真理」

という言い方をしている。本当の真理は人を救う恵であるということです。そしてそれは、教えているのではない。全部、告白です。ゲーテが、

「自分の文学は全部告白である。鳥が歌うのが止むにやまれずして歌つているように。」

と言つたのは、そういう角度です。止むにやまれずしてものを言つてゐるんです。

